原始經典の生活文化

——美粧について——

橘　堂　正　弘

紀元前三二世紀に成立していたとみられるパーリ「ジャータカ」を中心にして、古代インドの王族を主とする上流階級の人々の美粧がどのようであつたかを概觀したい。

水浴　暑熱のインドにあつては美粧の第一歩は水浴である。それは河、池、湖等の岸でするが、王宮や大邸宅には、その遊園地の中に意匠を凝らした蓮池を造りその數ヶ所に水浴場を設けた。[1] 水浴には婢女らに美しく清掃させた。[2] また、屋内の浴室[3]で甕に用意された水又は湯で行う場合は何種もの香料を入れた香水香湯が用いられた。[4] 水浴には助浴者 nahāpaka がおつて、[5] 體に香油をぬり、摩擦し、洗粉 nahāniya-cuṇṇa や化粧粘土 mattikā[6] で洗つた。水浴化粧料には多額の金が費やされた。[7]

鏡　化粧するのに鏡が用いられるが、象牙の柄の手鏡がみられ、[8] それらは圓形の鏡 mandala-ādāsa であつて、[9] 鏡の面は油、灰、磨粉、毛拂で清められたであろう。[10]

化粧料　香料を主としたもので、栴檀 candana が最も多く使用され、特にカーシの栴檀 kāsikacandana が貴重とされた。[11] 香粉として又は水や油でねつたクリーム狀のものとして、顏、髮、胸、乳房、四肢等にぬられた。「栴檀の香氣をもつ女」candanagandhinī[12] は魅力があつた。沈香 agalu, akalu[13] も次いで需要された。栴檀と混ぜ潰し支肢にぬつた記述[14]があり、各種の香料を調合して用いることもされた。龍腦香 kappūra[15] や姜黄 halidda[16] 等も體にぬられた。香料を取引する商人がおり店があつた。麝香の使用はみられない。ヴィナヤピタカには雄黄 manosilā[19] で顏面を彩り四肢を着色したとあり、雌黄 haritāla もまた用いられていた。それらは額につける斑點 tilaka にも使われた。[20] 顏にぬる煉物の化粧料 kakku についてブッダゴーザはカラシナ sāsapa、アルカリ性分 loṇa、化粧粘土 mattika、ゴマ tila、姜黄 haliddi の五種とその效能とを註釋している。[21]

アンジャナ　眼の周圍には añjana をつけた。[22] アンティモニ等によりつくられる。黑色の美顏料で、切れ長の大きな眼にみせるのに役立つと共に目を傷めたときの目藥でもある。[23] その入れものañjanī は美しく畫かれた飾りのあるもので、眼につけるのに金や銀でつくられた小さなペンジル añjana-salākā[24] が用いられた。ヴィナピヤタカには五種のアンシャナの成分と香料も入れられるのがでている。[25]

髮　漆黑で長くその先端が縮れて柔らかくふさふさとしているのがよい。[26] 白髮は老を表わすもので自分の頭に一本の白髮が生えたのをみて出家する王の話がある。[27] 白髮をはじめむだ毛を鑷子 saṇḍāsa で拔くこともされる。[28] 王は黄金の鑷子[29]を使わせた。櫛も用いられた。[30] 髮を着色することもあつたらしい。[31] 髮は水油、蜜蠟油[32]等でけずられ、栴檀の精がぬられて[33]香箱のような香よさをもつようにされた。王女が頭を洗うのに八人の婢女が水甕をもつて水を汲みに行くこともあつた。[34] 髮の型は八辮に組むこと等がみられる。[35]

理髮師　髮を結い整え鬚を剃るのに從事する理髮師 kappaka, nahāpita がおつた。[36] 父子相傳の場合がみられ、王宮に任える御用

理髪師は王のお氣に入りとなれば富裕であつた。[37] しかし彼等は「生れの卑しい」ものとされ、輕蔑される職技であつた。[38] 客の家を訪れて仕事をしたらしく店をかまえているのはみられない。

剃毛　[39] 鬚や毛を剃るのに美しい柄のついた剃刀 khura が用いられた。それは鍛冶屋村の鍛冶屋が專門につくつていた。[40] 體毛は「無くもなく有り過ぎるのでもない」[41] のがよいのであつて脫毛もされたであろう。出家苦行者は腋毛、鼻毛が長く見惡いというから剃毛脫毛もされていたと思える。ヴィナヤピタカには密處の毛を剃る風習のあつたことが出ているが、[43] 現代インド人の中にも殘つているらしい。[44]

手足　掌や足の裏、手足の爪を alattaka, lākhā 呼ばれる赤い化粧液でぬられた。[46] 手の爪を長く伸ばし手入するのも大事な美粧であつた。[47] 愛の技巧に爪跡をつけるのに用いられていて、[48] カーマストラの記述[49] の一端がみられる。ヴィナピヤタカに爪を長く伸して乞食している比丘を見てある女が彼を誘惑する話があるのもその例である。[50] 爪切り nakha-chedana も使用されていた。

齒　白くそろつていて美しく輝いているのがよく、爪と同じく齒にも注意をはらつた。[52] 齒を染める習慣はみられない。美しく磨くのに木片の楊子 danta-kaṭṭha[53] を使つた。キンマ tambūla[54] をかむ習慣が既に日常普及されていた。[55] キンマに五種の香料をいれて嗜好している王の例[56] もあるが、近時の如く檳榔の實と石灰を包んだかはわからない。[57] キンマは、香料店に賣つていた。

1　ファウスベル本 II 189　2　III 217　3　ダンマパダ註では豪商が水晶成の浴室を造らせた DhA III 88　4　II 11; III 498; IV 278, 402; VI 487　5　VI 154; DNI 74; AN III 25　6　V 89　7　王女が嫁する時王は十萬金を產する村を水浴化粧料として與えた II 403　8　V 302　9　Miln 120　10　AN I 210; Miln 133. なお、妻が夫の化粧を手傳つてみせている鏡 Therig 411, 美女が持つて顏を映した鏡 V 302, 自分の行爲の反省に使う鏡 MN I 415　11　IV 309, V 302; SN I 78. また hari-candana は八寶の一とされている V 223　12　III 190　13　Aguilaria agallocha, R. の樹幹の一部に樹脂分が凝集したもの　14　IV 440　15　II 416. Dryobalanopos aromatics, Gaerten の樹中の結晶體　16　V 89. Curcuma longa R. の根の粉末　17　VI 483　18　I 290　19　Vin II 107, 267　20　VI 74　21　VI 232; V 302　22　III 419; IV 219; Therag 960　23　MN II 65, Therag 773　24　III 419; Vin I 203, II 135　25　目藥として使用 Vin I 203; Kāmasūtra VII, 1, 4-5　26　V 202, 302; VI 218, 456. 釋尊も以前は漆黑の髪であられた DN I 115　27　I 138; III 393; V 177; VI 95　28　III 138, 393. 剃毛の項參照　29　I 138; V 177　30　ロブラの頭部の頭巾狀をしたもので黃金製のがみられる kanakagga V 156; Vin II 107, SBE XX 70 參照、koccha Therig 254, 411　31　III 138; Miln 11　32　Vin II 107　33　V 302, 156　34　V 284 また王や王女でも氣がわくこともあつた II 324; III 393　35　II 5; Therag 772. また V 203, 249 參照　36　II 5; Vin I 249　37　王は十萬金を產する村を與えた I 138; 最上の村を與えられた VI 96　38　II 5; III 452; Vin IV 7 しかし王等に親しく仕えた　39　Apadā 308　40　III 281　41　VI 457. 毛 loma は美しく V 302 長すぎない V 204 のが魅力であつた　42　VI 488. Vin II 134

では長い鼻毛は pisācillika の如しといつて禁じ鑷子を用いたりして拔かしめた 43 比丘、比丘尼に禁ず Vin II 134 及び IV 259 44 木村秀雄教授「古代文化」十二ノ一 九頁 45 V 204, 302; VI 218, 456; Therag 459（遊女）、男もヤニキャアをしたであろうが出てこない 46 Lowsonia alba, Lamk. の葉の液汁、或は臙脂虫の液汁からつくつた、「古代文化」十二ノ一五頁 ピンバの如き脣 VI 456 etc. もこれをぬつたのであろうか。

47 V 204; Vin II 133 48 I 438; V 204 49 Kāmasūtra II, 4, 1-31 50 Vin II 133 及び漢譯四分律雜犍度之一。以後長く伸ばし膺いたりするを禁じた 51 Vin II 133; SN IV 169 52 V 156; VI 218, 488. 美しい齒は、髮、赤い脣、白い肌、若さと共に女の五つの美 pañca-kalyāṇa の要素である I 394; III 406; DhA I 387. 齒による愛の技巧はみられない 53 III 379; V 88, 156; VI 75 54 ベテル Betel Piper betle L. の葉で、心臟形をし、長さ十センチ内外刺激性の味と芳香がある山田憲太郎教授「愛情の匂いと生命の味」一〇五頁 55 II 303, 380 56 I 266 57 I 291. 龍谷大學教授木村秀雄先生には「印度古代の女性の美粧」「（古代學協會、京都）十二ノ一所收、「カーリダーサ文學集第一季節集雲の使者」百華苑刊等において、カーリダーサ文學を中心の美粧に關する御考證があり、本稿はその御教示に依つております。

新刊紹介（三）

友松圓諦「佛教における分配の理論と實際」（上）
——佛教經濟思想研究(2)——

序篇 佛教の經濟思想的研究について

本篇 印度佛教僧團に於ける分配の一般的考察

一、分について
二、古代印度社會一般に於ける分配事情
三、釋尊とその初期僧團
四、施與行爲の成立
五、最初の分配委員設置因緣
六、僧團分配の指導原理
七、分配原理と是を妨げる實際上の諸問題
八、不可分物と可分物
九、財物の區分と分配單位
一〇、分配を契機とする教理の問題

A5版 本文二七八頁 索引 二〇頁
春秋社刊 定價一、五〇〇圓